

3 房総の終末期方墳

(1) 上福田13号墳周辺の古墳

上福田13号墳が含まれる古墳群は、上福田古墳群とよばれている。上福田古墳群は龍角寺古墳群の南東方に位置し、10数基の古墳で構成されている。これらの古墳のうち円墳と前方後円墳は印旛沼に面した台地の西側に多く位置し、それらは墳形から前期から中期にかけての古墳と考えられる。台地の東側は、利根川に注ぐ根本名川から続く谷が樹枝状に入り込んでおり、その台地の端に上福田13号墳は位置する。13号墳のすぐ南西にも方墳と思われる高まりがある。現在墳頂には祠が祭られており若干改変されている可能性もあるが、墳丘は13号墳と同じくらいの規模があるようにみられる。横穴式石室は確認していない。また、13号墳の北西方には、特異な形の横穴式石室で以前から知られている上福田岩屋古墳¹⁰⁾が所在する。上福田岩屋古墳も石室が開口する南東側は、根本名川から続く谷に面している。上福田岩屋古墳は、小松眞一氏

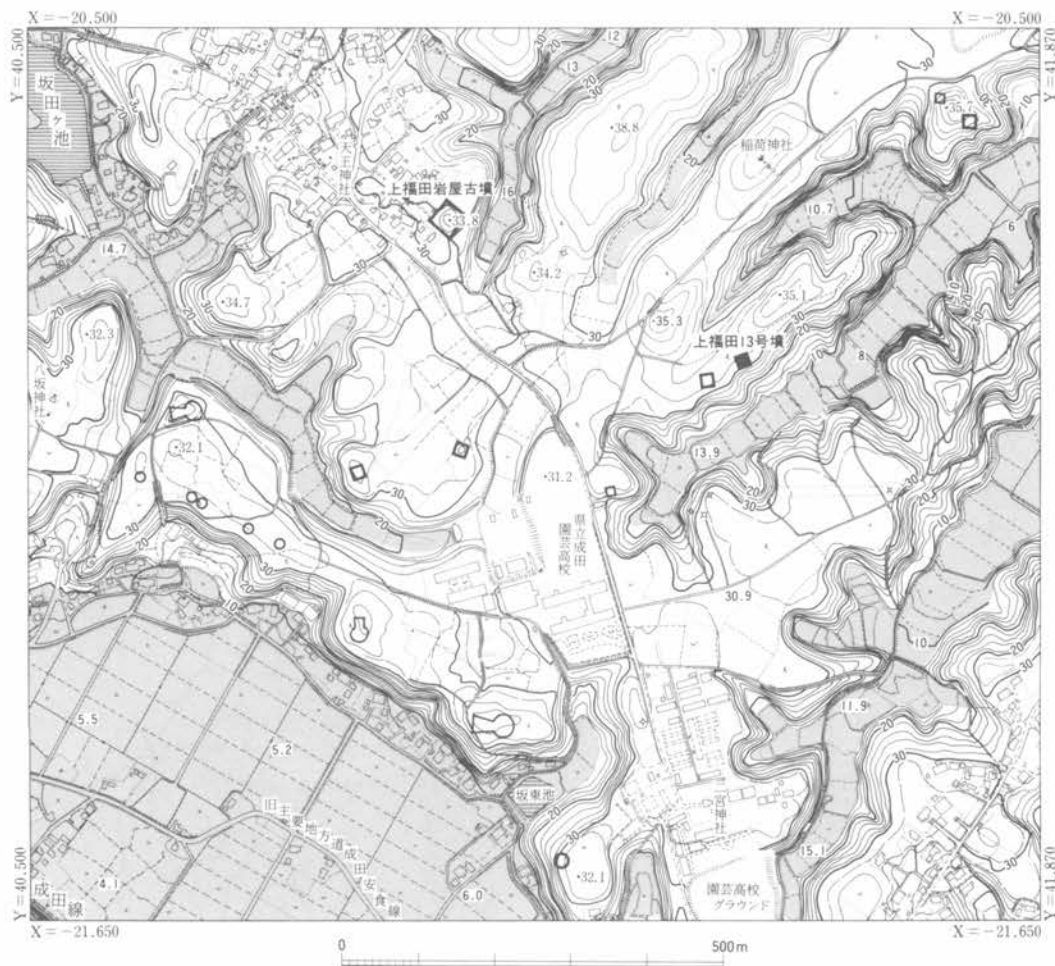


Fig.52 上福田13号墳周辺の古墳

により特殊な石室としてすでに大正時代に紹介されている¹⁰⁾。古墳は二段築成の方墳であるが、周溝は不明である。石室前面には、平坦面がある。石室は上福田13号墳と同じ貝化石を含む砂岩で構築されている。石室は形からみると横穴の玄室を思わせるような形態で、T字形に横に広がっている。床には間仕切り石がある。奥壁・側壁は四面とも持ち送りで構築されており、天井は高い。小松眞一氏はその特異な石室の形態から、朝鮮半島との関係も示唆している。この古墳も出土遺物は知られてなく、時期が決めにくい古墳である。

以上のように、上福田13号墳の周辺の古墳は、印旛沼に近い台地の端に前期から中期にかけて円墳と前方後円墳が所在し、終末期の方墳は根本名川から続く谷に面している。

(2) 印旛沼周辺の終末期方墳

さらに、目を印旛沼・手賀沼にまで広げてみる。この地域には古墳時代の前期から古墳は造られているが、大型の古墳はみあたらない。この傾向は、古墳時代の後期まで続く。中小規模の古墳の数は多いが、大型の前方後円墳はないのである。この事実は、県内の他の東京湾沿岸・九十九里沿岸・芝山地区・小見川地区などの古墳群中には、大型の前方後円墳が含まれている

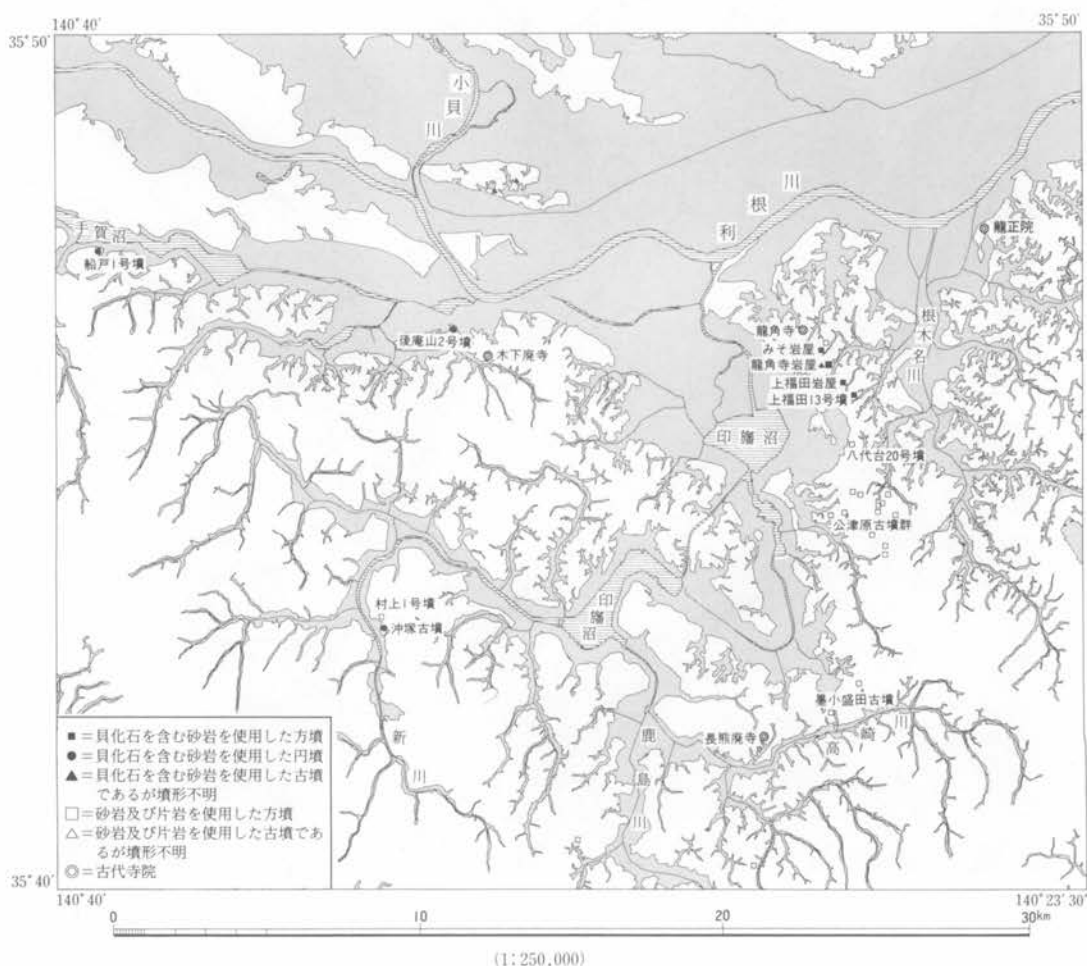


Fig. 53 印旛沼周辺の終末期古墳及び古代寺院位置図

ことと違う点である。ところが、終末期の方墳に限るとそれまでの古墳のあり方とは変わってくる。すなわち、当時としては日本一大きな一辺が80mの方墳龍角寺岩屋古墳が造られていることは、既に紹介したとおりである。

県内の終末期古墳の埋葬施設の多くは、横穴式石室である。筆者は、先に県内の横穴式石室を形態と分布する地域から大きく三つに分類したことがある⁽¹³⁾。その一つが、印旛沼周辺のこの地域なのである。特徴は、横穴式石室の構造が多くの場合単室なのである。成東町駄ノ塚古墳をはじめとした九十九里浜から山武郡、そして東京湾岸の養老川流域までの横穴式石室が、多くの場合軟質の砂岩を使用し、横穴式石室が複式構造のものが多⁽¹⁴⁾い地域とは明らかに違うのである。

また、この地域の石室材には、上福田13号墳と同じように貝化石の混じる砂岩が使用されている古墳がある。代表的な例としては、龍角寺岩屋古墳、その北方に位置する龍角寺みそ岩屋古墳⁽¹⁵⁾、上福田岩屋古墳、印西町の上宿古墳⁽¹⁶⁾等がある。この石材は、成田層のなかの特に貝層が集中した部分を切り取ったものである。この貝層は、木下貝層ともよばれ成田周辺ではその露頭を数か所で見ることができる。現在確認することができる木下貝層の露頭では、貝はほとんど固まっておらず石室材としては不適であり、所在地は明確にできないが、周辺地域に石室材として適当な木下貝層があり石室材はそこから切り出したものと考えている。砂岩中の貝化石の固まった石材を使用している埋葬施設は、北は利根川の対岸の古墳から、南は八千代市の沖塚古墳⁽¹⁷⁾の範囲で確認している。沖塚古墳は円墳であり6世紀末から7世紀初め頃の古墳と考えられることから、この石材を使用した埋葬施設をもつ古墳のなかでは古い古墳である。先に記したように、この地域の横穴式石室は単室構造という共通点があるが、そのなかでも貝化石の混じる砂岩を使用した石室をもつ古墳は、さらに一つのグループとして捉えることができるのではないかと考える。

(3) 終末期方墳

最後に、終末期方墳の性格を考えてみたい。終末期方墳が千葉県に多いことは、しばしば指摘されている。そのなかでは、日本一大きな龍角寺岩屋古墳がよく知られているが、最近の大規模な発掘調査の成果により中小規模の終末期方墳が多数確認され、数のうえからも終末期方墳は千葉県が一番多い。また、先の印旛沼周辺の古墳の分布図のなかにも示しておいたが、この地域には龍角寺に代表される大和山田寺系の軒先瓦を屋瓦に採用した古代寺院が所在する。しかも、この龍角寺の軒先瓦の系譜をくむ古代寺院は、房総半島で多く確認されている⁽¹⁸⁾のである。

このような状況のなかで、龍角寺岩屋古墳に関して安藤鴻基氏は、「終末期最大の方墳でその墳種・規模からみて、単なる在地豪族との関係だけでは到底理解できない。大型の終末期方墳には、・・(筆者略)・・畿内の中核の一部ではあるが、蘇我氏に関する有力者の墳墓とみられるも

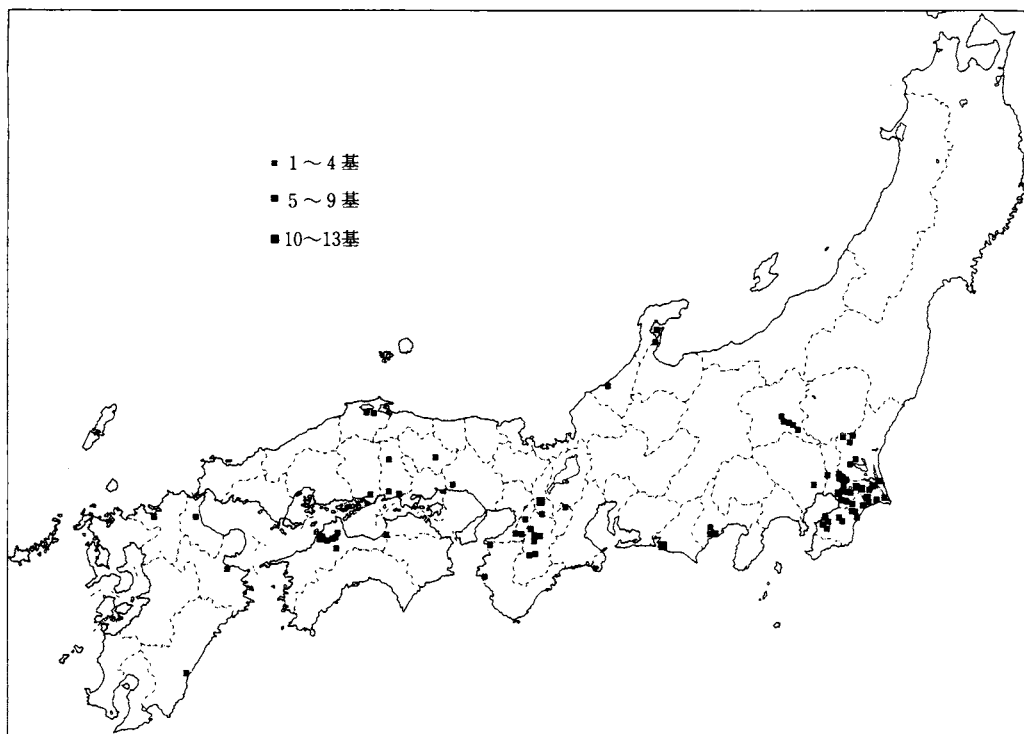


Fig.54 終末期方墳の分布 (安藤 鴻基「終末期方墳」より改図転載)

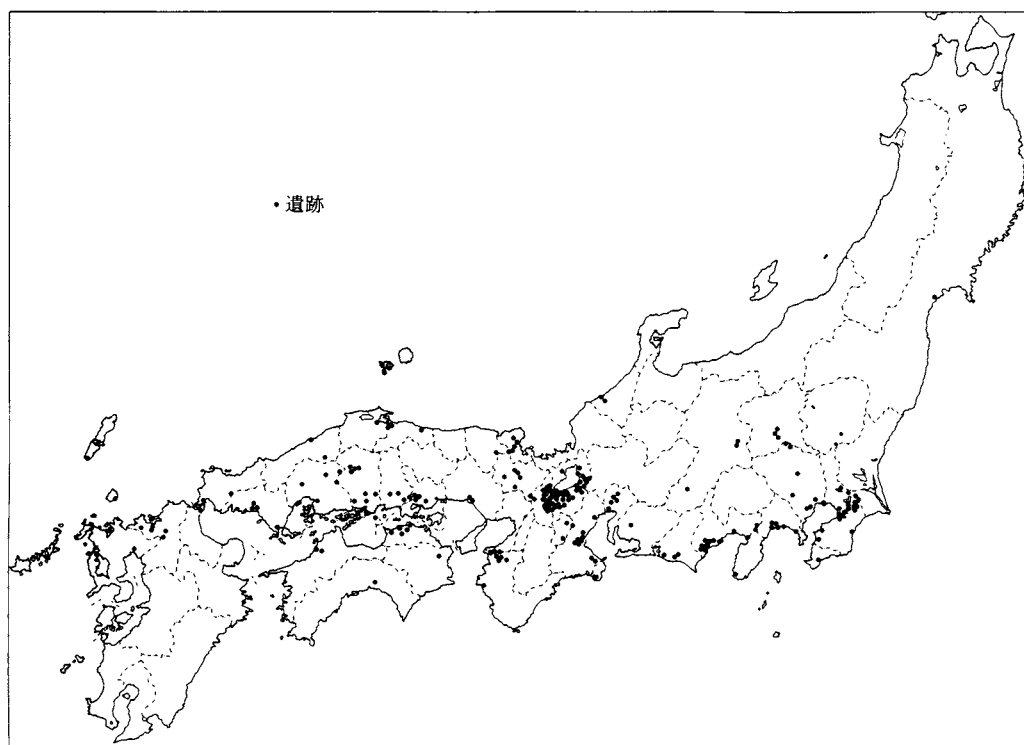


Fig.55 畿内産土師器の分布 (林部 均「律令国家と畿内産土師器」より改図転載)

のが存在する。そして、龍角寺の屋瓦は、蘇我倉山田石川麻呂の発願によって創建された奈良県の山田寺のものによく似ている。また、千葉市に鎮座する式内の蘇賀比咩神社は、蘇我氏の本貫地である奈良県橿原市の式内・宗我坐宗我都比古神社に対応し、ともに蘇我氏の氏神的存在とみられる。蘇賀比咩神社の位置は、岩屋古墳や龍角寺の所在地から相当離れているが、岩屋古墳の被葬者の強大な権力を思えば、必ずしも遠くはない。むしろ千葉県内の終末期方墳や龍角寺系(屋瓦所用)寺院跡の分布からすれば、その勢力が及んでいたとみることもできる。・・

(筆者略)・・以上のような言わば状況証拠から私見では岩屋古墳の被葬者について、蘇我一族の一人と考え・・」と考えを示している。

今回畿内産土師器模倣土器を調べていくなかで、畿内産土師器の分布と終末期方墳の分布が非常に似ていることに気づいた。Fig. 55は畿内産土師器の分布図である。この図をFig. 54の終末期方墳の分布と比較すると、分布状況がほとんど同じであることが明らかである。千葉県にこれだけ多い終末期方墳も、日本中どこでもあるわけではない。東北地方ではいまだ確認されていない。東海地方や北陸地方では、海に近い地域には所在するが、内陸では確認されていない。関西方面でも畿内に多いことは当然としても瀬戸内沿岸地域に多いが、四国の太平洋側や九州南部ではほとんど確認されていないのである。「飛鳥・奈良時代の土器」は7世紀から8世紀代の土器である。終末期方墳も古い古墳は6世紀末と考えられ、新しい古墳も8世紀初め頃のものもあると思われるが、いずれにしても終末期方墳の時期と畿内産土師器の製作された時期は重なっている。もちろん古墳から畿内産土師器が出土することもある。すなわち、同じ時期の古墳と遺物が同じような分布状況を示しているのである。

畿内産土師器については、林部均氏の詳細な研究がある。林部氏の研究によれば、畿内産土師器の地方での出土は、律令国家とのかかわりの度合いをあらわしているとされ、律令国家の意図に基づくものであるとされている。また、畿内産土師器のあり方について、西日本と東日本では違いがあるともいう。では、畿内産土師器と終末期方墳の分布は非常に似ているので、終末期古墳の偏った分布も畿内産土師器の地方での出土と同じ理由によるものと考えることができるのであろうか。今回細かい検討はしないが、国内の山田寺系軒先瓦の分布も畿内産土師器・終末期方墳と似たような分布を示しているのである。

筆者は、房総半島に終末期方墳が多いことについて、畿内政権の7世紀代の東国経営と関係があるのではないかと考えたことがある。今回、畿内産土師器と終末期方墳の偏った分布の状況が非常に似ていることに気づき、その考えを補強することができたように思う。すなわち、畿内産土師器の分布が畿内を中心に当時の主要街道に沿って出土しており、宮城県で1例出土例があるがその分布のほとんどが関東地方までなのである。畿内産土師器の分布の先端と終末期方墳の分布の先端が同じなのであり、その末端に近いところに最大の終末期方墳と多くの中小規模の終末期方墳があることは、その先方の東国経営に関係していると考えられるのである。

房総半島に多い終末期方墳と大和山田寺系の軒先瓦を採用した古代寺院は、安藤氏のいうように蘇我氏となんらかの関係があったものと考えられ、当然、龍角寺岩屋古墳の築造は在地豪族との関係だけでは理解できないであろう。しかし、畿内産土師器も同じような分布状況しており、それらのことも含めて考えると、逆に単に特定の氏族との結びつきだけでも理解できないと思うのである。

上述のように、畿内産土師器・終末期方墳・山田寺系の軒先瓦が房総半島に多く分布する理由は、古墳時代から律令国家へと移行する7世紀代に、畿内政権が他の地域よりもこの地域と多く接触をもっていたことを示しているのであり、それはこの地域が関東以北の東国経営に重要な地点に位置していたためと考えたいのである。またその場合に、当時畿内政権の中核にあって大きな力をもっていたであろう蘇我氏が関与していたことは当然考えられる。

4 結 語

本書は、「新東京国際空港」に近い千葉県印旛沼東岸に建設された主要地方道成田安食線建設に伴う発掘調査報告書である。

調査成果については報告のとおりであり、多くの住居跡・古墳・土器などを発見した。そのなかでも、特筆されなければならないのは、上福田13号墳の調査成果である。上福田13号墳は、当初小規模の方墳と考えられたが、調査の結果墳丘こそ小さいものの、周溝を二重に巡らし、横穴式石室は龍角寺岩屋古墳の石室材と同じ貝化石の固まった砂岩を使用していることが明らかとなった。石室内から副葬品は出土しなかったが、前庭部から埋葬かその後の祭祀に伴うと思われる7世紀後半から末ころの土器が出土した。終末期の方墳が多い房総半島のなかでは中規模の古墳であるが、この地域の古代史を考える上では重要な古墳である。

また、畿内産土師器を模倣した土器を確認できたことにより、8世紀には畿内の土器の模倣が確認されていたが、それが7世紀から行われていたことが明らかとなった。

終末期の方墳と畿内産土師器を模倣した土器、これらは畿内政権が古墳時代から律令体制に移行する時期の重要な歴史的な産物である。そして、これらの歴史的産物は、畿内政権がこの地域を東国経営に重要な地域と考えていたことを示しているものとする。

最後に、保存された上福田13号墳の石室が今後活用され、一般県民に千葉県の古代史の一部が理解されることを望む。またこのような文化財がまだまだ多く眠っているであろうこの地域が、これ以上緑をなくし、歴史を想像できないような環境にならないことを祈って報告を終わる。

文献

- (1) 千葉県文化財センター『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅宅地関連事業）地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1985年 3月30日
- (2) 千葉県文化財センター『主要地方道成田安食線道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』 1985年 3月
- (3) 房総風土記の丘『龍角寺古墳群測量調査報告書』 千葉県教育庁文化課 1982年 6月
- (4) (1) に同じ。
- (5) (1) に同じ。
- (6) 石土啓夫ほか『龍角寺尾上遺跡・龍角寺谷田川遺跡』 印旛郡市文化財センター 1991年 9月
- (7) (1) に同じ。
- (8) 小川和博「千葉県成田市宝田山ノ越貝塚研究素描」『奈和』第18号 奈和同人会 1980年
- (9) 越川敏夫ほか『龍角寺ニュータウン遺跡群』龍角寺ニュータウン遺跡調査会 1982年
- (10) 谷 旬 「関戸遺跡」『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』千葉県文化財センター 1983年
- (11) 橋口定志『あじき台遺跡』あじき台遺跡調査団 1983年
- (12) (1) に同じ。
- (13) 滝口 宏『下総龍角寺調査報告書』千葉県教育委員会 1962年 3月
- (14) 安藤鴻基「終末期方墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集第一法規 1992年3月
- (15) 吉田 格ほか『関東の石器時代』雄山閣 1973年
- (16) 林部 均「律令国家と畿内産土師器」『考古学雑誌』第77巻 第4号 1992年 3月
- (17) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』 1976年 3月
- (18) (17) に同じ。
- (19) 『江原台遺跡』江原台第1遺跡発掘調査団 1979年
- (20) 『成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』成田市囲護台遺跡発掘調査団 1990年 3月
- (21) (1) に同じ。
- (22) 白石竹雄・天野 努ほか『公津原Ⅱ』千葉県文化財センター 1981年 3月
- (23) (13) に同じ。
- (24) 佐久間豊「斜格子状暗文を有する土師器杯について」『史館』第15号 市川ジャーナル社 1983年10月
- (25) 酒井清治「房総における須恵器生産の予察（Ⅰ）」『史館』第13号 市川ジャーナル社 1981年
- (26) 上野純司ほか『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1980年 2月
- (27) 山口直樹「土製鋤先模造品について」『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1980年 2月
- (28) 菅原文也「福島県の祭祀遺跡」『福島の研究』第1巻 地質考古編 清文堂 1986年12月
- (29) 小沢 洋「上総南西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 第一法規 1992年 3月
- (30) 石田広美「大畑遺跡」『関東官衙遺跡の検討』茨城県考古学協会 1990年11月
- (31) 工藤英行「上福田岩屋古墳」『成田市の文化財』第9輯 成田市教育委員会 1980年 3月
- (32) 小松眞一「下総国に於ける或る三・四の石室古墳」『人類学雑誌』第37巻第4号 東京人類学会 1915年 4月
- (33) 永沼律朗「印旛沼周辺の終末期古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 1992年 3月 第一法規
- (34) 多宇邦雄・永沼律朗「みそ岩屋古墳の検討」『古代』第65号 早稲田大学考古学会 1979年 3月
- (35) 高木博彦「印西町大森上宿古墳」『ふさ』5・6合併号 ふさの会 1974年12月
- (36) 八千代市史編さん委員会「沖塚古墳」『八千代市の歴史』資料編 原始・古代・中世 八千代市 1991年 3月
- (37) 永沼律朗『長熊廃寺跡確認調査報告書』千葉県教育委員会 1986年 3月
- (38) 『山田寺』奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館 1981年10月
- (39) (33) に同じ。